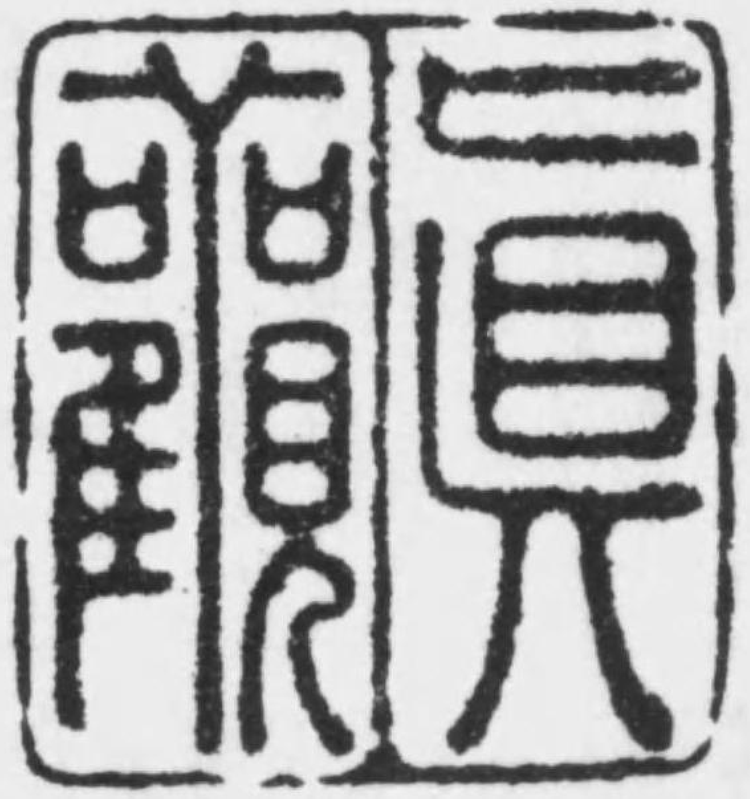
3

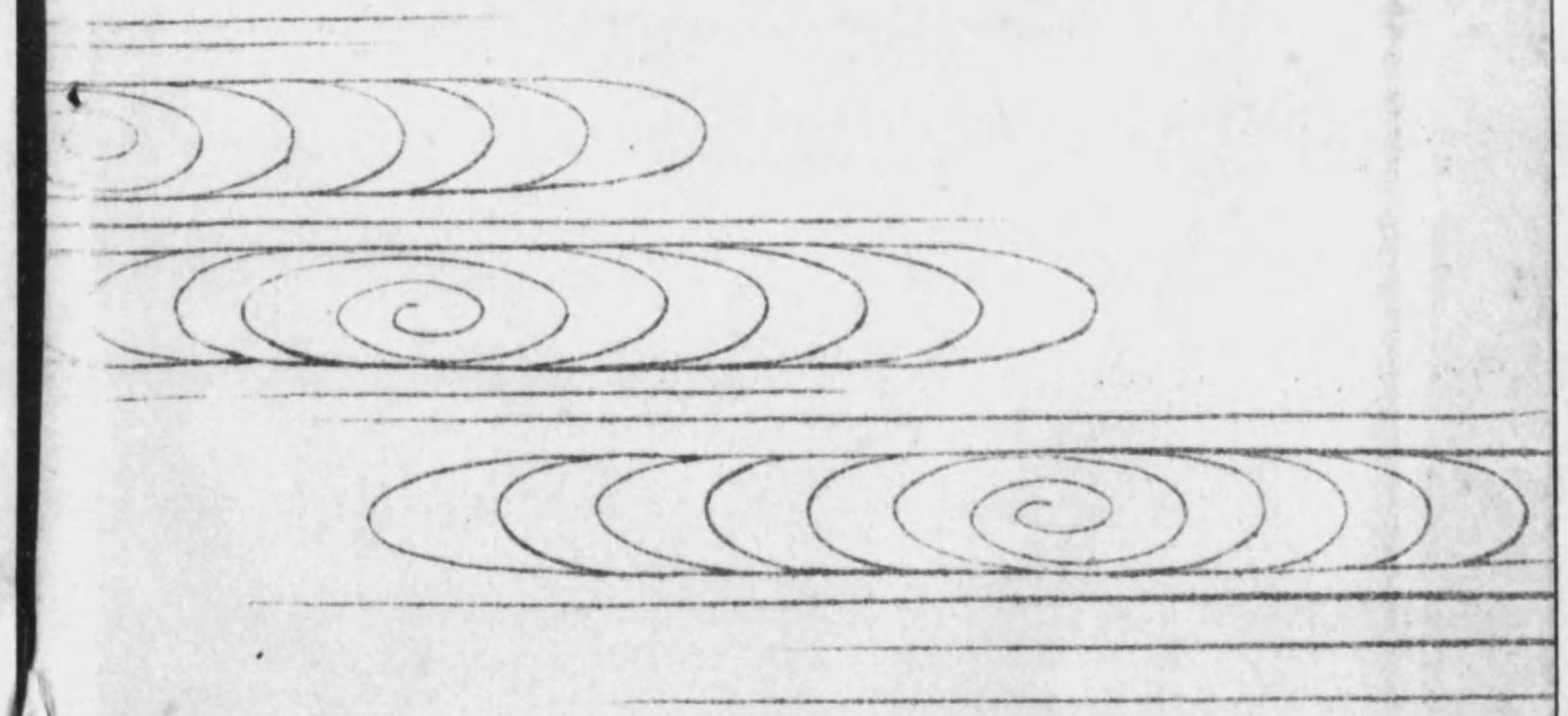
第六天
土蜘
舎利
小鍛冶
石橋

外九

特257
559
342
518
始



特257
559



342-318.

第六天

作者不詳

梗概

解脱上人(ワキ)伊勢國度會の宮に詣で、折から來合はせたる二人の女性(前シテ、前ツレ)に當社の緣起を尋ぬれば、この川は昔倭姫の命が皇大神宮の宮居を求めて二見の浦に上り、この川にて裳の穢れを洗ひ給ひしにより、御裳濯川と申すなり、かくて當社は垂仁天皇の御宇に宮柱太しく立てて、日神月神を崇め申すなり、かく語るは神の告ぞ、なほ御身には佛法の障碍あれば、夢中に來りて、その由を知らせんといひて姿を隱しぬ。(中入)

上人神前に詣で心を澄ましける處に、大空は冴えながら風雨雷電頻りに至るよと見る間に、佛法を破却する第六天の魔王(後シテ)惡魔、陰魔、死魔、天子業魔、その他の從類を隨へて現れ出づ。上人卽ち合掌して觀念をなせば、不思議や天つ空より素盞嗚尊(後ツレ)現れ給ひ、魔王等を打ちて散々に苦を見せ給へば、魔王の通力も盡き果て、今より後は二度この土に來るまじと誓ひを立てて、虛空に消え失す。

曲柄 切能 五番目(略初能)
季節 三月
稽古順 五級
所 伊勢國宇治山田市大神宮

謡ひ方

前は淀みなくさらりと、後は手强く雄大に謡ふべし。

△**シテ** 女性なれど少し强味を含みて、∴强吟にて閑かに一聲を謡ひ出し、サシは運びを附け、上歌は朗かに、ワキとの掛合は閑かに、サシはさらりと、上端は朗かに謡ふ。

△**後シテ** 第六天の魔王なれば豪壯雄大にどつしりと謡ひ出し、地との掛合は力の拔けぬ樣に謡ふべし。

△**ツレ** 連吟はシテに從ひ、二の句はさらりと高く謡ふ。

△**後ツレ素盞嗚尊** 朗かにさらりと謡ふ。

△**ワキ** 解脱上人なれば位を保つ心にて、確かりと次第を謡ひ、道行は朗かに、シテとの掛合はさらりと、「かくて神前に」と閑かに、「其時解脱」と落着いて閑かに謡ふ。

△**地** クリはさらりと引立てて、サシもさらりと、クセは閑かに出で運びを附け、中入前をとくと閑め、「俄かに大空」と確かりさらりと「夥しや」と大きく、シテとの掛合は乘つて力を籠め、「其時解脱」と閑かに寬たりと、「不思議や天つ」と位進め、「出で給へり」と大きく「卽ち素盞嗚」と又進んで、

昭和七・五・一三・內交・圖

第六天

以下勢ひを付けさらりと謡ふべし。

語　釋

行くも歸るも — 後選集第十五卷雜歌一に載す、蟬丸の歌「これやこの行くも歸るも別れては知るも知らぬもあふさかのせき」とあるを引く。

心の花 — 眞實の心。

解脫上人 — 名は貞慶、左小辨藤原貞憲の子、興福寺の覺憲に就きて法相を學び、居ること二十餘年、終に宮中の最勝講に預る。當時僧法の浮華を厭ひ、講終りて山城國笠置寺に隱る。時に年二十九、後に後鳥羽上皇の屈請を受く。承元二年海住山寺に移り、保元三年此に寂す。壽五十九、解脫上人と謚せらる。法相宗の明匠なり。

音羽 — 山城國宇治郡にある地名。

多氣の都 — 齋宮の住み給ふ處、多氣郡にあり。

度會の宮 — 大神宮をいふ。又內宮の別名なり。

神路山 — 伊勢國度會郡の東北部、朝熊山の西南にある山名。

御裳濯川 — 五十鈴川の別稱、伊勢國度會郡神路山發、宇治山田市皇大神宮の西を過ぎて二派に分れ、二見浦に入る。

千木もゆがまず — 千木は屋根の上に×形をなして高く差し出たる木をいふ。

正直捨方便 — 法華經に、「正直捨=方便-但說=無上道-」とあり。即ち法華經は、釋尊出世の本懐の經なれば、その說くところ、他の諸經の如く方便の權敎にあらず、徹頭徹尾最上圓妙の一乘法を說くとなり。

上求菩提 — 上菩提の佛果を求むること、これと同時に、下一切の衆生を化益するをば、併せて上求菩提下化衆生といふ。これ佛教に於ける自利、利他の二行なり。これを行するものを菩薩、即ち大道心の衆生といふ。

神風に心安くぞ云々 — 續古今集第七卷、神祇歌に載す西行法師の歌、「神風に心安くぞまかせつる櫻の宮の花の盛りは」とあるを引く。

月讀の — 內宮七別宮の一つなり。

裳裾のけがれ給ひしを — 倭姬命世紀に、「五十鈴の川上に(天照大御神を)遷幸なし奉る時に、河際にして倭姬命、御裳の裾長くけがれ侍りけるを洗ひ給へり。それよりのち御裳須會川と名づく」とあり。

日神、月神、蛭子、素盞嗚 — 日神は天照大神のこと、月神は月讀命のこと、蛭子、素盞嗚と共に伊弉諾伊弉冊二神の御子なり。神皇正統記に詳しく見えたり。

枝を連ぬる — 連枝のこと、兄弟の意。

六種の震動 — 釋尊の說法あるとき天地感動したる狀態をさす。形音の意。

第六天の魔王 — 欲界の第六天に住する魔王、欲界六天中の第六、他化自在天のことなり。欲界天の主にして、他の樂事を假りて以て自巳の樂となすが故にこの名あり。即ち第六他化自在天に住せる天主を魔王とす。四魔中の天子魔これなり。四魔とは、煩惱魔、五陰魔、死魔、天子魔をいふ。この天にあるもの、深く世間の樂に著するを以て、人の道を修するものあるに對しては、或は巳が眷屬を減し、或は巳が宮殿を破壞するものと想ひ、これを惱亂し、その正道を障害し、遂に人をして正眞の慧命を失はしむ。故に天子魔と名づけ、單に天魔ともいふ。第六天の魔王とは即ちこの他化自在天の天子魔のことなり。

間狂言

末社間。

斯樣に罷り出でたる者は。忝くも伊勢大神宮に仕へ申す末社の神にて御座候。我等の是へ出づる事餘の儀に非ず。まづ都に解脫上人と申す尊き沙門のおはすが。初めて大神宮へ參詣致されし處に。第六天の魔王ども寄り合ひ。此度解脫上人を魔道へ引き入れ。佛法を妨け申さんとて。種々樣々に變じて來るを。大神宮御存じなされ。急ぎ沙門に告け知らせんと思し召し。假に人間と現れ上人に行き合ひたく思ひ。御裳濯川の由來。宮居を委しく御物語りあり。さてかの魔王ども集まり。佛法を妨けんとたくむ由慥かに御告けなさるれば。沙門は隨喜の悅びをなし申さるゝ。殊に大神宮も別して大切に思し召すにより。如何樣なる魔王どもなりとも障碍をなさんと致さば。佛力神力にて忽ち退け申さうずる事。お疑ひあるまじき事と存ずる。その故は。外宮の神達は申すに及ばず。住吉の明神出雲の大社。總じて日本國中の神々までも。力を添へ給はんとの御事なれば。佛法を妨けん事は思ひも寄らぬ事ぢや。併し斯樣に申せども。魔王といふ者は唐天竺我朝に於て。虛空三界に多きものにて。風雨流通に働くものなれば。早この中にも何事か仕らふも知らぬ程に。まづ我等は罷り歸り用意致し。急ぎ解脫上人に力を添へ申さうずる。當社の神々までも殘らず御出であれ。その分心得候へ〳〵。

魔王團扇　長さ一尺八寸程紗を張り色彩を施す、

輪冠

金色輪状の冠にて本曲、舎利、大會等のツレ黒垂したる上に頂きて出づ

本曲及び大會の後シテ等に用ふ

裝束附（第六天）	ワキ	ワキツレ	前ツレ	前シテ	後シテ	後ツレ
	解脱上人	從僧二人	女	女	第六天魔王	素盞嗚尊
	角帽子　着附小格子　白大口 水衣　掛絡　緞子腰帶　扇　數珠	角帽子　着附無地熨斗目　白大口 水衣　緞子腰帶　扇　數珠	面、連面　鬘　鬘帶　襟赤 着附摺箔　唐織着流	面、增　鬘　鬘帶　襟白赤 着附摺箔　唐織着流	面、大癋見　鉢卷　赤頭　襟紺 着附厚板　半切　狩衣又ハ法被 繡紋腰帶　魔王團扇	面、天神　鉢卷　黑垂　輪冠 襟縹　着附厚板　白大口　側次 繡紋腰帶　劍

第六天

素謡座席順　後ツレ　ワシテ　ツレ　キ

ワキ僧ワキツレ二人上ゲ　次第　ヨワク　拍子ニ合

「心の花を手向とて。心の花を手向とて。大神宮に參らん

ワキ詞「これは解脱と申す沙門にて候。われ未だ大神宮に參らず候程に。この度思ひ立ち伊勢參宮と志し候

三人道行上「旅衣。けふ九重を立ち出でゝ。けふ

九重を立ち出で〻末は音羽の山櫻
花の瀧川これぞこの。行くも帰る
も逢坂の杉の木の間に波寄する。
湖むかふ鏡山。やうやう行けば鈴鹿
路や。多氣の都の程もなく度會の宮に。
着きにけり度會の宮に着きにけり

ツレ女二人上
シテ女
一セイ
ツヨク
拍子合ハズ

神路山。御裳濯川のその上に。契り
し事の末は違はじ

ツレ二ノ句

永き代までも
仕へ來て　盡きぬ惠みは。頼もしや

シテサシ上

見渡せば千木もゆがまずかたそぎも
反らず　これ正直捨方便の象を現
すかと見え。古松枝を垂れ。老樹緑
を添へ。皆これ上求菩提の相を表
す。ありがたかりし。宮居かな

○小謡

下歌 拍子三合 中 神風に心安くぞ任せつる。上歌 ○櫻の宮の花盛り。櫻の宮の花盛り。花の白雲立ち迷ひ空さへ匂ふ月讀の移り来る影ものどかにて。知るも知らぬも道の邊の。行きかふ袖の花の香に春一入の。氣色かな春一入の氣色かな。○

シテ詞 これなる御僧はいづくよりの御參詣にて候ぞ

ワキ これは都方より出でたる沙門にて候。和光同塵の本願は結縁の始め。濁世の我等なんぞ神力の妙樂を蒙らざらんや。神秘を委しく語り給へ

シテ 優しき人のいひ事や。懇に語り參らせうずるにて候

クリ 地上 拍子三合ハズ それ御裳濯川といつぱ。

口初能ノ節ハ斗拭

○サシ曲獨吟

倭姫の命。七百餘歳に至るまで。宮居を尋ねおはします シテサシ上〽然れば當國二見の浦に上り 同 裳裾の穢れ給ひしをこの川にて洗ひしにより。御裳濯川と。申すなり。そも〳〵當社は垂仁の御宇に始めて。下つ岩根に宮柱太敷き立て。日神月神をあが

め申すなり。蛭子素戔嗚は。枝を連ぬる御神。高天の原の昔より シテ上〽今も變らぬ神徳の 同 その品々の方便を。語るも。いかで盡くさまし仰ぎてもなほ餘りあり。かゝる恵みをおしなめて。頼めや頼め神の告。木綿四手に榊葉添へ。御法の障碍あるべし

と夢に来りて申すとてかき消すやうに失
せにけりかき消すやうに失せにけり ○中入来序
ワキカヽル上 かくて神前に心を澄ますをりふしに
地 拍子三合ハズ 俄かに大空さえかへり。風雨雷電
肝を消し六種の震動おびたゝしや

そもそもこれは

後シテ上 第六天 大癋 そもそもこれは。仏法を破却する。
第六天の魔王とはわが事なり

不思議や天つ空よりも

その時解脱合掌して

地 ノル 拍子三合 さて又供奉は誰々ぞ シテ 六天には煩悩
の悪魔 地 陰魔死魔 シテ 天子業魔
その外従類悟りの道を。障碍の群鬼
は。さまざまなり ワキ上 その時解脱
同 掌して その時解脱合掌して。
観念をなしければ不思議や天つ
空よりも素盞嗚現れ出で給へり

地上
早笛
「即ち素盞嗚現れ給ひ。即ち素盞嗚現れ給へばさしもに猛き六大なれども恐れをなしてぞ見えたりける

ツレ素盞嗚尊
「素盞嗚なほも。怒り給ひ

同
素盞嗚なほも。怒り給ひて。寶棒を取り直し打たんとせしに。飛び違ひ須彌に。上らんとするを。引きとゞめ大地に

打ち伏せて。忽ち散々に苦を見せ給へば今よりこの土に來るまじと。誓ひをなせば。尊は雲居に上らせ給ひ。魔王は通力盡き果て。魔王は通力盡き果て。虚空に跡なく。失せにけり

土蜘

作者不詳

曲柄　五番目（略二番目）
季節　七月
稽古順　五級
所　前、京都源頼光邸
　　後、京都北野東南土蜘蛛塚

梗概

源頼光（ツレ）病床に臥せしほどに、胡蝶といふ女（ツレ）典藥の頭よりの藥を持ち來りて病を慰む。やがて夜も深更に及んで、一人の僧形（前シテ）出で來り、頼光の病を問ふ。怪しみて名を問へば、「惱み給ふもわがせこが來べき宵なりさゝがにの蜘蛛の振舞」といふより早く姿は蜘蛛の如くなり、千筋の絲を出だして頼光にうち掛く。頼光乃ち枕頭の膝丸を執りて斬りかゝれば、僧形の姿は消え失せぬ。（中入）

この物音に驚きて、獨武者（ワキ）等驅けつけ、その子細を聞きて座中を見れば、血痕斑々たり。乃ち痕を追うて化生の者を退治せんと出で立つ。

獨武者等旣にして古塚の前に達し、これぞ化生の栖なると、塚を崩し石をかへせば、火焰を放ち水を出だして、岩間より鬼神の形現れ出づ、自ら名乘りて「われこそは葛城山に年を經し土蜘蛛（後シテ）の精魂なり」と、いふより早く千筋の絲を投げかけしが、獨武者等終にこれを斬り伏せて都に歸りぬ。

謠ひ方

輕き曲なれど變化多く、前はさらりと、後は手強く謠ふ。

△**シテ**　化生の僧形なれば、手強く確かりと一聲を謠ひ出し「いかに頼光」と、かゝつて氣をかけ、以下頼光との掛合力を入れて謠ふ。

△**後シテ**　凄味を帶び剛壯に、手強く大きく謠ふべし。

△**ツレ頼光**　餘り輕からざる樣に、病床の身なれば閑かに調子高くならぬ樣に謠ひ出し、トモ幷にツレとの掛合も閑かに、シテとの掛合は心持を變へさらりと凜々しく謠ふ。中入後「いしくも」とさらりと出で、語りは氣を變へ、確り淀みなき樣に謠ふ。

△**ツレ胡蝶**　花やかにならぬ樣さらりと謠ふ。

△**トモ**　輕く謠ふ。

△**ワキ**　「御聲の高く聞え」とかゝつて出で、「言語道斷」より確かりと謠ふ。

△**後ワキ**　勇壯に雄々しく、さらりと謠ひ出し、「其時獨武

者」と乘つて確かりと謠ふ。

▽地　初同はさらりと出で、「化生と見るよりも」と確かりと出で、返しより段々位を進め、中入後「崩せや崩せ」と手强くさらりと、「下知に從ふ」より乘つて手强く、「現れたり」と大きく「其時獨武者」以下力を籠めて手强く謠ふべし。

能の異式（小書）

入違之傳 ― 中入前にシテは後見座へクツロギ、ワキが幕より出でたる時、橋掛にてワキと形があるなり。

語釋

典薬の頭 ― 醫官の長、現今の侍醫頭の如きをいふ。

こゝに消えかしこに結ぶ云々 ― 千載集第十九巻釋敎歌に載す、前大納言藤原公任の歌、「こゝに消えかしこに結ぶ水の泡の浮世に廻る身にこそありけれ」とあり。詞書に、「維摩經十喩此身は水の泡の如しといへる心を詠み侍りける」とあり歌意は、此身水の泡の如しとは、淨名經方便品に、「此身如レ泡不レ得二久立一」とあるをいふ。

今は期を待つ ― 死期を待つこと。

色を盡して ― 手段をつくしてとの意。

わがせこが來べき宵なり云々 ― 日本紀に、「わがせこが來べき宵なりさゝがにの蜘蛛のおこなひこよひしるしも」とあるを、古今集序の古註にかくこれを直して引用す。これは天皇の御寵愛ありし衣通姫、君の御幸を待つ心にてよまれし歌なりといふ。

五體 ― 頭と二手二足をいふ。

化生 ― 妖怪などをいふ。

御太刀つけ ― 太刀にて切りつけたる跡。

たんだへ ― 宴席にて詩歌を賦する時、題を探りて分ち取ることを探題といふ。此言葉より轉じて、たゞ物を探る意味に用ひらる。

土も木もわが大君の云々 ― 太平記第十六巻、日本朝敵のこと、紀朝雄の歌。「天平四年に、紀伊國名草郡に長二丈餘の蜘蛛あり、足手長くして力人に超えたり。網を張る事數里に及びて、往來の人を慘害す。然れども官軍勅命を蒙りて、鐵の網を張り、鐵湯を沸して、四方より責めしかば、此蜘蛛遂に殺されて、其身分々に爛れにき。又天智天皇の御宇に、藤原千方といふ者ありて金鬼、風鬼、水鬼、隱形鬼といふ、四の鬼を使へり。金鬼は其身堅固にして、矢を射るに立たず、風鬼は大風を吹かせて、敵城を吹破る。水鬼は洪水を流して、敵を陸地に溺らす。隱形鬼は其形を隱して、俄に敵を拉ぐ。如レ斯の神變、凡夫の智力を以て防ぐべきにあらざれば、伊賀伊勢の兩國、是がために妨げられて、王化に順ふ者なし。爰に紀朝雄といひける者、宣旨を蒙りて、彼國に下り、一首の歌を詠みて、鬼の中にぞ送りける。『草も木もわが大君の國なればいづくか鬼のすみかなるべき』四の鬼此歌を見て、我等惡逆無道の臣に從ひて、善政有德の君を背き奉りける事天罰遁るゝ處なかりけりとて、忽に四方に去りて失ひければ」云々とあり。

葛城山 ― 河内國金剛山の別稱。

賴光 ― 源滿仲の子、圓融、花山、一條、三條、後一條の五朝に仕へ、左馬權頭となり、內昇殿を聽さる。正四位下に叙され春宮大進となる。最も射をよくして武勇無雙なり。

膝丸 ― 源家重代の寶刀の一にて、髭切りと共に名あり。長さ二尺七寸にて滿仲が唐土より渡來せし名匠に打たせしと傳ふ。膝丸の名に二樣あり、一は罪人を切りしとき膝まで切落したればかくいひ、一は牛千頭が膝の皮を取おとしたればかくいふと。何れが眞なるか考證なし。

千條の絲 ― 蜘蛛の巢を譬へていふ。

間狂言

早打間。

是へいそがしさうにふと罷り出でたるを。如何樣なる者ぞと御不審なされうずる。これは忝くも源の賴光の御內。獨武者に仕へ申す者にて候。某唯今こゝ許へ出づる事別の儀にても御座ない。此程賴光は風の御心地にて。以ての外に惱ませ給ふにより。胡蝶と申す女房衆の御藥を持參申され。醫者數を盡し御養生なさるれども。未だ御快氣なされぬにより。諸人の息を詰めてのみ居申す處に。唯今各々の御雜談なさるゝを聞けば。昨夕夜半ばかりの事なるに。いづくとも知らず物凄しき僧形一人。君の御枕近く參りて申す樣。今夜の御心地はいかゞおはしますぞと申し上ぐる。その時賴光思し召す樣は。はや夜も更けたるに不思議なりと思ひ給ひ。さて汝は何者ぞと御意なさるれば。かの僧少しも動顚せずして。わがせこが來べき宵なりさゝがにの。蜘蛛の振舞かねて知るしもとある。古歌を連ぬると思し召せば。たけ七尺ばかりの蜘蛛の像と現るゝを。何が君の御事なれば。不斷御前に置かせられたる。膝丸と申す御太刀にて切り付け給へば。其儘身を開き遁れんとする處を。遁さじとたゝみかけて遊ばせども。化生の者なれば虛空に失せて見えなんだ處に。某の賴み申す御方は。常に武道を心掛け早い人なれば。此事を聞くと否やに御所へかけ付け給ひ。唯今は御高聲に聞え候ひつる間。取る物もとり敢へず伺候仕りたると。具に仰せ上げられければ。誠に早くも來りたるとて御感に預り。卽ち其時の樣子を委しく御雜談なされ。かの膝丸と申す御劔を。今日よりして蜘蛛切丸と名付け給はんとの御諚にてあると申す。其時賴み申す人の宣ふ樣。眞に珍しからぬ御手柄と申し御威光といひ。めでたき御

事は申し上け難き次第なり。さて彼僧形を如何なる者ぞと存ずれば。昔大和國葛城山に。年久しく住み馴れし蜘蛛の精なるが。五體より思ひの儘に糸を繰り出だし。自由自在に變ずると聞く。又或時は鬼神となつて人を惱まし。往來の者を遣らず通さず取つて服す。斯樣のいたづら者を唯置かんもいかゞなり。其上かの者は御手にかゝり血を引きて候へば。この血を慕ひ行き。かの者を退治申さうずると。御前にてきつと仰せ上けられ。その儘御歸りあり卽ち御用意遊ばすにより。御内の衆はいづれもお供に參らるゝ音ちやに。某も伺候致さうと存じて罷り出た。まづ賴み申す人の私宅へ急がう。誠に斯樣にめでたき折柄ならでは。我等如きの者の終に差し出る事の御座ない程に。せめて斯樣の砌なりとも。手に合はふと存ずる。いやそこ許に大勢人の聲のするは何事ぞ。何と賴み申す人の御出でぢや。是は如何な事。我等も隨分急いで罷り出でたに早おそなはつた。さりながらお跡から見え隱れになりとも參らうか。いや〳〵皆の衆は綺羅美やかな出で立ちで御座らうに。我等のこの不斷の體にて行く事はいかゞな。是非に及ばぬこれより宿へ罷り歸らうずる。さりながら唯今にても我等を尋ぬる人あらば。心おくれたると思はれざる樣に。某の如才のなき通り御申しあつて給はれ。構て其分心得候へ〳〵。

装束附（土蜘）

役	人物	装束
ツレ	源頼光	直面　風折烏帽子　襟淺黄　着附厚板　白大口　繡紋腰帶　扇　出衣
トモ	頼光從者	直面　襟萠黄　着附無地熨斗目　素袍上下　小刀　扇　持太刀
ツレ	胡蝶	面、連面　鬘　鬘帶　襟赤　着附摺箔　唐織着流
前シテ	僧	直面　角帽子(沙門)　襟縹　着附無地熨斗目　水衣　緞子腰帶
前ワキ	獨武者	侍烏帽子　着附厚板　白大口　掛直垂　繡紋腰帶　小刀　扇
後シテ	土蜘蛛	面、顰　赤頭　鉢卷　襟紺　着附段厚板　半切　法被　繡紋腰帶　打杖
後ワキ	獨武者	白鉢卷　着附厚板　白大口　法被　繡紋腰帶　褌　太刀
ワキツレ	從者二人	白鉢卷　着附厚板　白大口　繡紋腰帶　太刀
作物		一疊臺　山(掛巣)　投巣

土蜘

素謡座席順 トモ ツレ女 頼光 シテ ワキ

ツレ女上 次第 ヨロク 拍子ニ合

〽浮き立つ雲の行方をや。浮き立つ雲の行方をや。風の心地を尋ねん

サシ上 気ヲカヘ 拍子ニ合ハズ

これは頼光の御内に仕へ申す。胡蝶と申す女にて候。詞 スラリ さても頼光例ならず。悩ませ給ふにより。典薬の頭より。御薬を持ち。唯今頼光の御所へ

参り候。いかに誰か御入り候　トモ男「誰にて
御座候ぞ　ツレ「典薬の頭より御薬を持
ちて胡蝶が参りたる由御申し候へ
トモ「心得申し候。御機嫌を以て申し上げう
ずるにて候

ツレ頼光サシ上「ここに消えかしこに結ぶ
水の泡の浮世に廻る身にこそあり
けれげにや人知れぬ心は重き小夜
衣の恨みん方もなき袖をかたし
きわぶる思ひかな　トモ詞「いかに申し上
げ候。典薬の頭より御薬を持ち
て胡蝶の参られて候　頼光「此方へ来れと
申し候へ　トモ「畏つて候。此方へ御参り候へ

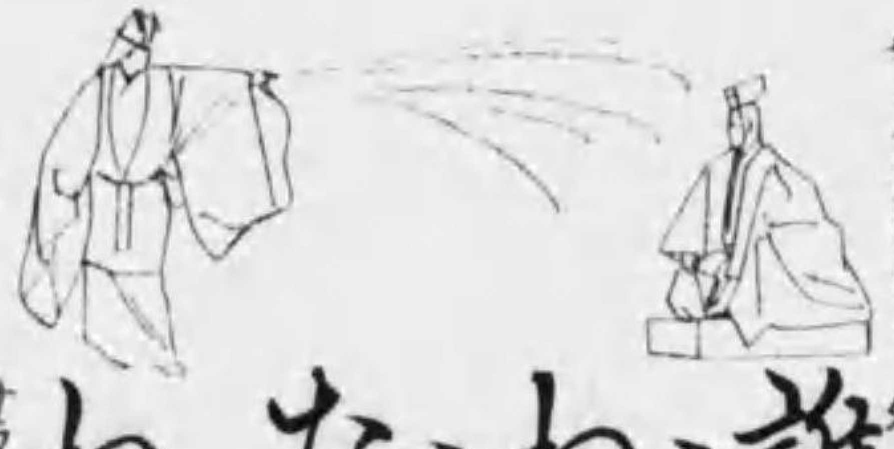
ツレ「いかに申し上げ候。典薬の頭より御
薬を持ちて参りて候。御心地は何と

御入り候ぞ　頼光「昨日より心も弱り身
も苦しみて。今は朝を待つばかりなり
ツヨカル上ゲ「いやいやそれは苦しからず。病は
苦しき習ひながら。療治によりて
癒る事の。例は多き世の中に
頼光「思ひも捨てず様々に　同上「色を盡し
て夜晝の。色を盡して夜晝の境

○小謡

も知らぬ有様の。時の移るをも。覺
えぬ程の心かな。げにや心を轉ぜず
そのまゝに思ひ沈む身の。胸を苦し
むるこゝろとなるぞ悲しき。○
シテ僧上 一セイ ツヨク「月清き夜半とも見えず雲霧の。
かゝれば曇る。心かな。いかに頼光。御
心地は何と御座候ぞ　頼光カヽル上「不思議やな

シテ一セイ



誰とも知らぬ僧形の深更に及んで
われを訪ふ。その名はいかにおぼつか
な。
シテ詞「おろかの仰せや。惱み給ふも
わが背子が來べき宵なりさゝがにの
頼光カヽル上「蜘蛛の振舞かねてより。知らぬといふ
になほ近づく。姿は蜘蛛の如くなるが
シテ詞「かくるや千筋の糸筋に
頼光上「五體をつゞ

め。
シテ「身を苦しむる
同上 化生と見るより
も。化生と見るよりも。枕にありし
膝丸を。抜き開きちやうと斬れば。
そむくる處をつゞけさまに。足もため
ず。薙ぎ伏せつ。得たりやおうと罵
る聲に。形は消えて。失せにけり形は
消えて失せにけり
シテ中入早鼓

ワキ獨武者詞（カツテ）

「御聲の高く聞えし程に馳せ參じて候。何と申したる御事にて候ぞ

頼光（サラリ）

「いしくも早く來たる者かな。近う來り候へ語つて聞かせ候べし。さても夜半ばかりの頃。誰とも知らぬ僧形の來りわが心地を問ふ。何者なるぞと尋ねしに。わがせこが來べき宵なりさゝがにの蜘蛛のふるまひかねてしるしもといふ古歌を連ね。即ち七尺ばかりの蜘蛛となつて。われに千筋の糸を繰りかけしを。枕にありし膝丸にて切り伏せつるが。化生の者とてかき消すやうに失せしなり。（気ヲカヘ）これと申すも偏に劔の威徳と思へば。けふより膝丸を

（語　気ヲカヘ確カリ）

蜘蛛切と名づくべしなんぼう奇特なる事にてはなきか　ワキ「言語道斷今に始めぬ君の御威光劔の威德。かたがた以てめでたき御事にて候。

又御太刀づけの跡を見候へば

又御太刀づけの跡を見候へばげしからず血の流れ候ぞ此血をたんだへ化生の者を退治仕らうずるにて候

頼光「急いで參り候へ　ワキ「畏つて候　ワキ中入早鼓間

後ヅレ獨武者　立衆上ヨリ　一セイ　拍子三合ハズ

其の時獨武者進み出で

「土も木もわが大君の國なればいづくか鬼の。やどりなる　ワキ「その時獨武者進み出でかの塚に向ひ大音あげていふやう。これは音にも聞きつらん。頼光の御内にその名を得たる獨武者。いかなる天魔鬼神なりとも。命魂を斷たん

同 この塚を崩せや崩せ人々と。呼ばはり叫ぶその聲に。力を得たる。ばかりなり 下知に從ふ武士の。下知に從ふ武士の。塚を崩し。石をかへせば塚の内より火焔を放ち。水を出だすといへども大勢崩すや古塚の。怪しき岩間の陰よりも。鬼神の形は。現れたり

後シテ上 土蜘 ノラズ 拍子ニ合ハズ 手強ク確カリ

汝知らずや我昔。葛城山に年を經し。土蜘蛛の精魂なり。なほ君が代に障りをなさんと。頼光に近づき奉れば。却つて命を斷たんとや

ワキ上 その時獨武者進み出で

同 その時獨武者進み出で。汝王地に住みながら。君を惱ますその天罰の。劔にあたつて惱むのみ

かは。命魂を断たんと。手に手を取り
組みかゝりければ。蜘蛛の精霊千筋
の糸を繰りためて。投げかけ投げか
け白糸の。手足に纏はり五體をつゞめ
て。仆れ臥してぞ見えたりける

ワキ中「然りとはいへども　同「然りとはいへども

神國王地の恵みを頼み。かの土蜘蛛を。

中に取りこめ大勢乱れ。かゝりければ。
劔の光に少し恐るゝ氣色を便りに
斬り伏せ斬り伏せ土蜘蛛の。首うち
落し。喜び勇み。都へとてこそ。帰り
けれ

舍利

世阿彌元淸作

曲柄　切能　五番目（略初能）
季節　不定
稽古順　五級
所　京都東山泉涌寺

梗概

出雲國美保の關の僧（ワキ）都に上りて東山泉涌寺に參り、唐土より渡されたる十六羅漢及び佛舍利を拜まんものをと、寺の能力に開帳を乞ひて拜禮、感淚に咽びしほどに、忽然として一人の里人（前シテ）出で來り、共に佛舍利を拜して、その貴さ謂れなど物語りけるが、一天俄かにかき曇り、堂前に電光閃くよと見る間に、かの里人は面色變りて鬼神の姿となり、今は何をか包まん、われは古の足疾鬼が執心なり、今もこの舍利に望みありと、雲煙を立てて人の目をくらませ、その紛れに舍利を奪ひ、天井を蹴破りて虛空に消え失せぬ。（中入）時も隔てず、この寺を守護する韋駄天（後ツレ）現れ出で、足疾鬼を追つかくれば、眞の姿を現したる足疾鬼（後シテ）はまたこれを奪ひ返されじと、三十三天を逃け廻りしが、終に韋駄天の寶棒に打ち伏せられて、泣く泣く舍利をさし出だし、今は心も茫々として力弱くも消え失せたり。

謠ひ方

位の重くならぬ樣に、前はさらりと、後は手强く力を入れて謠ふべし。

△**シテ**　確かりさらりと謠ひ出し、ワキとの掛合は粘らぬ樣に、サシは閑かめに、上端はうつきりと、「今は何をか」と前と心持を變へ手强く、以下段々と詰めて謠ふ。

△**後シテ**　鬼神なれば手强く力を入れ、「誰も望みの」と大きく、「左へ行くも」と少しゆるめて謠ふ。

△**ツレ韋駄天**　雄壯にさらりと謠ふ。

△**ワキ**　上り僧なればさらりと謠ひ出し、道行は朗かに、「けにや事として」と殊勝に、「一心頂禮」と少しく閑め、シテとの掛合はさらりと謠ふ。

△**地**　初同は寬たりと閑かに、「月雪の」と晴れやかにさらりと、クリサシはさらりと、クセは閑かめに出で運びを附け、段々さらりと、「栴檀沈瑞香」と氣合銳く、返しより段々進んで烈しく、留を閑め、中入後の「欲界色界」と乘つて確か

りと出で、以下段々運んで力の拔けぬ樣に謠ふ。

語　釋

美保の關 ― 出雲國八束郡にありし關、今美保關町。

泉涌寺 ― 山城國愛宕郡、現今京都市東山區今熊野町にあり。眞言宗泉涌寺派の本山にして、本尊彌勒、釋迦、阿彌陀の三尊を安置す。開山は弘法大師にして、初め法輪寺と號す。文德天皇の齊衡二年、藤原緒嗣、神修上人のために、修理を加へ仙遊寺と改む。爾後廢頽せしが、順德天皇の建保六年俊芿律師、之を再興し、伽藍成るに及び、本堂の側傍より清水涌出する故を以て、改めて泉涌寺と號す。此時より眞言、天台、禪、律四宗兼學の道場となる。貞應三年官符を賜はり勅願寺となる。始め四條天皇を此寺域に葬り奉りしより、往々至尊の御陵墓となり、戰國の衰世に及び、後土御門天皇以後遂に歴代の陵寢となり、泉涌寺陵と稱して、今日に及びたり。舍利殿は本堂の東にあり。中央に舍利塔(佛牙舍利を納む)を安置す。

十六羅漢 ― 釋迦の門弟子中阿羅漢果を得たる十六人の像をいふ。十六羅漢は釋尊上足の弟子にして、舍利弗、目犍連、迦葉、迦旃延、倶絺羅、離婆多、周利槃陀伽、難陀、阿難陀、羅睺羅、憍梵波提、賓頭盧頗羅墮、迦留陀夷、劫賓那、薄拘羅、阿寃樓馱是なり。羅漢とは阿羅漢果の略稱にして、無生或は應供と譯し、佛勅を受けて壽命を延長し永くこの世に住して正法を守護すといふ。

足疾鬼 ― 梵語、羅刹或は羅叉婆(ラークシャサ)の譯名にして、また可畏、暴惡、或は護士とも譯せらる。鬼衆の一なり。速疾鬼といひ、毘沙門に奉仕する惡魔なり。

韋馱天 ― 梵語「エータ」にして二十諸天の一なり。韋天將軍ともいひ、略して天神ともいふ。大智度論に、鑒戚と譯せり。姓は韋、諱は琨、南方天王八將の一臣にして、四天王、三十二將中の首なり。性聰慧にして塵欲を離れ、淨行を修して天欲を受けず、親しく佛囑を蒙りて佛法を外護し、東西南の三洲を統護し、利生化益を主として、大に群生を濟ふ。故に伽藍を建つれば皆この像を安置し、崇敬して以てその護法の功を表彰す。又俗に魔王佛舍利を奪ひて逃げ去りしとき、これを追ひて取り戻したりとて、よく走る神とて世に知らる。

一心頂禮云々 ― 舍利禮文の句、「一心頂$_{ニ}$禮萬德圓滿、釋迦如來、眞身舍利、本地法身、法界塔婆$_{一}$、我等敬禮爲$_{ニ}$我現身$_{一}$、入我我入、佛加持故、我證$_{ニ}$菩提$_{一}$、以$_{ニ}$佛神力$_{一}$、利$_{ニ}$益衆生$_{一}$、發$_{ニ}$菩提心$_{一}$、修$_{ニ}$菩提行$_{一}$、同入$_{ニ}$圓寂平等大智$_{一}$、今作$_{ニ}$頂禮$_{一}$」とあり。即ち一心に佛を禮拜することをいふ。

聞法値遇 ― 佛法を直接に聞く機會のこと。

一劫 ― 四十里立方の石を、天衣(重量五厘)にて三年に一回これを拂ひて、磨滅し盡す時間を一小劫といひ、六十四小劫を一大劫といふなど、諸種の說あり。劫は梵語劫簸の略稱にて分別、時節と譯す。即ち測知し難き長時限といふことなり。

後五の時代 ― 大集經に、釋尊滅後に五箇の五百年ありて、五百年每に佛道の修行に故障あることを說けり。第一の五百年は解脫堅固、第二は禪定堅固、第三は多聞堅固、第四は造寺堅固、第五は鬪諍堅固是なり。こゝに後五の時代といふは、二千年を過ぎて、後の五百年をいふ。即ち鬪諍堅固の時代にして、佛法を修するものもなく、證するものもなく、唯鬪諍を以て本と心得る時をいふ。

三如來 ― 三國傳來の三如來、即ち嵯峨清涼寺の釋迦、京都因幡堂の藥師、信濃善光寺の阿彌陀をいふ。

四菩薩 ― 胎藏界曼荼にて、中臺大日の四方の隅角にある普賢(東南)文殊(西南)觀音(西北)彌勒(東北)の四菩薩、又金剛界三十七尊の中四方に配當したる十六大菩薩をいふ。法華經神力品第二十一に法華經弘布の命を蒙りたる上行、無邊行、淨行、安立行の四菩薩、是を普通に四菩薩と稱すれども、こゝは上にある三如來に對するとすれば、我國にある四菩薩の像なるべきか、或は傳敎、弘法、慈覺、智證の四大師をいふにや、未だ考證し得ず。

ないをん ― 涅槃といふに同じ、入滅のこと。

雙樹 ― 沙羅雙樹をいふ。

鷲の御山 ― 靈鷲山のこと、釋迦の說法をなしたる山名。

白毫の秋の月 ― 佛の三十二相の一つで、額上にある星をいふ。

四諦の曉の雲 ― 集、苦、道、滅の因果の法を四諦といふ。苦とは、迷界の果報の皆苦なるをいひ、集とは、迷の因種の能く未來の苦界を集起するを以て、煩惱惡業を集と名づく。滅とは、迷の苦果を滅無したる果に名づけ、道とは、悟りて滅に至る因、即ち四正勤、四如意足等の三十七科の佛道の因を道といふ。而して此四種の迷悟の因果は、何れも審諦不虛の道理なるが故に、これを諦といふ。

金冠 ― 有威德鬼の着る冠。

せんだん沈瑞香 ― 佛前に焚く香木の名。

外道 ― 佛法以外の道を修むるもの。

欲界色界無色界 ― 三十三天を此三界に大別す。人間は欲界の下なり。欲界とは、財、色、名、食、睡眠等の諸欲を以て充さるゝ境界、我等の境界はこの一部なり。色界とは、禪定力の勝れたる境界にて、欲界に優る果報を有し、總じては四禪天に、別しては十六天乃至十八天等に分たる。然れども尚色身なるが故にこの名あり。無色界は、更に進める境界にて色身を有せざる心靈の世界なり。

化天 ― 化樂天或は樂變化天の略稱、欲界に六天ある中の第五に位し、兜率天の上、三十二萬由旬のところ、須彌山よりすれば、六十四萬由旬の所にあり。その壽八千歳なりといふ。

帝釋 ― 梵語釋迦提桓因陀羅「シヤクラ、デーヴーナーム、インドラ」といひ、能天帝と譯す。羅什三藏は譯して釋提桓因といへり。帝釋の語は、釋迦の釋と、因陀羅の漢譯なる帝とを合稱したるなり。六欲天の第二天、即ち忉利天の主にして、須彌山の頂に居る、その居城を善見城といふ。帝釋この天に王として、慈悲柔輭の形をあらはし、寶冠を戴き、身に種々の瓔珞を被り、金剛杵を持てり。往昔、迦葉佛滅後に一人の女あり。發心して佛塔を修し。三十二人またこれを助修す。この功德によりて、この女忉利天主と生れ、三十二人また輔弼の臣となり、中央善見城の四方各に八天、合して三十三天を現はす故に忉利天即ち三十三天の名ある所以なり。

梵王 ― 大梵、梵輔、梵衆の三天の總稱なり。梵迦夷三天といひ、また梵世天ともいふ。梵は淨の義なり。汚染なき天なるが故にこの稱あり。梵王は梵天王の略稱。

間狂言

能力。

（ワキシカジカ）誰にて渡り候ぞ（ワキシカジカ）遙々と御上りなれば拜ませ申したく候へども。この泉涌寺の佛舍利と申すは。聊爾に取り出す事はならず候さりながら。當月は某の御戶開くる番にて。折節鍵を持ち合はせたるといひ。殊に今日はお舍利を取り出だす日なれば。まづ御戶を開き牙舍利を拜ませ申さうずる間。まづかう御通り候へ。ごと〳〵〳〵きい。ぎり〳〵ぎり〳〵ぎり〳〵。御戶を開き申して候間。心靜かに御拜み候へ。（中入後）なう悲しやの。桑原〳〵桑原〳〵〳〵。やつと氣がついた。さても〳〵めり〳〵どうど鳴つたは何事であらうぞ。これは雷神（なるかみ）かと存じたればそれではなかつた。何であらうぞ。これに付けても後生が一大事ぢや。愚僧は菩提の道をば隨分心がくるとは存ずれども。今の鳴る時。佛とも法とも辨へのなかつたは。かねての心がけが肝要ぢや。先舍利殿へ參らう。是は如何な事。やあ〳〵此お舍利をば何者がどちへ取つていたぞ。今思ひ當つた。最前出雲の國美保の關より上られたる。かの僧が取つて逃げたものであらう。さても〳〵腹の立つ事かな。急いで追つ掛け申さう。いや是にだまつて居りやるよ。いそいで佛舍利を返しやれ（ワキシカジカ）知らぬと陳じたりとも。知らせいでは置くまいぞ（ワキシカジカ）心得申し候（ワキシカジカ）けにと御出家の身にて僞りは仰せられまい。さてお尋ねありたきとは如何樣なる御事にて候ぞ（ワキシカジカ）なか〳〵子細候間。我等の聞き覺えたる通り物語り申さうずる。さる程にこの泉涌寺の佛舍利と申すは。釋尊御入滅の御時。八萬の大衆は申すに及ばず。五十二類までも泣き叫ぶ折節。足疾鬼といふ足早き鬼は。成佛の素懷を遂げんと思ひ。佛の御齒を引きもぎ行方知らず虛空に失せけるを。韋駄天といふ本尊は。佛に供を備ふる時。毎朝定りて三部の鐘を三つ打つに。一つ打つ内には三千世界へ行き渡り。二つ目には諸佛へ悉く相觸れ。三つ目には本地へ御歸りある程の。早き駄天の追つかけ給へば。疾鬼は須彌を七遍まで逃げ廻るを。韋駄天は逆に廻りて追つ付き。そのまゝ取り返して持ち給ふを。さる子細あつてわが朝に渡り。釋尊肉付の牙舍利なれば。常は御戶をさへ開き申さぬを。今日は御出である日なれば取り出だし。方々に拜ませ申して置きたるを。いづくともなく取られ。迷惑仕りたるが。さてお僧これに御座候中には。如何樣なる者が參りて候ぞ（ワキシカジカ）何と足疾鬼が來りお舍利を取り。虛空に失せたると存じたれば道理ぢや。この天井の破れたる體はなか〳〵人間の業とは見え申さず候。それならば人力の分にてはなるまじく候間。幸ひ韋駄天が守り本尊なれば。かの佛に祈誓をかけ。再び取り返さうと存ずる間。方々も力を添へて給はり候へ（ワキシカジカ）心得申し候。一心頂禮萬德圓滿釋迦如來。此度足疾鬼の取りて行く。佛舍利を取り返し。二度當寺の御寶となしてたび給へ。南無韋駄天。南無韋駄天。

舎利塔　一疊臺

雅子方着座すれば、舞臺正面先に一疊臺を出し、その上に作物の臺を据ゑ、更に火焔玉を頂ける木製色彩の塔を載す、之を舎利塔となし、シテ中入の前にこの火焔玉のみをとり、臺を踏み碎く所作あり、而して後シテとなり火焔玉を携へて出づ

小道具	作物	ツレ 韋駄天	後シテ 足疾鬼	前シテ 里人	ワキ 僧	装束附（舎利）
舎利塔	一疊臺　舎利臺	面、天神　輪冠　黒垂　鉢卷 襟紺　着附厚板　白大口　側次 縫紋腰帶　打杖	面、顰　赤頭　鉢卷　襟紺 着附厚板　半切　法被　縫紋腰帶	面、三日月　黒頭　鉢卷　襟淺黄 着附無地熨斗目　水衣 縫紋腰帶　扇	角帽子　着附無地熨斗目　水衣 緞子腰帶　扇　數珠	

舎利

素謡座席順　ワキ　シテ　ツレ

ワキ僧詞　サラリ

「これは出雲の國美保の関より出でたる僧にて候。われ未だ都を見ず候程に。この度思ひ立ち洛陽の佛閣一見せばやと思ひ候

道行上　スラリ

「朝たつや。空ゆく雲の美保の関。空ゆく雲の美保の関。心はとまる古里の跡の名残も

重なりて。都に早く着きにけり都
に早く着きにけり。日を重ねて急ぎ
候間。程なく都に着きて候。まづ承
り及びたる東山泉涌寺へ参り。大
唐より渡されたる十六羅漢。又佛
舎利をも拝み申さばやと存じ候。
△これなる寺を泉涌寺と申すげに

候。寺中の人に委しく案内をも尋ね
ばやと思ひ候。いかに誰か御入り候
狂言「何事を御尋ね候ぞ ワキ「これは遥かの
田舎より上りたる僧にて候。當寺の
御事を承り及び遥々参りて候。
大唐より渡りたる十六羅漢。又佛
舎利をも拝み申したく候 狂言「げにげに

聞し召し及ばれて御参り候か。卿爾に拝み申す事叶はず候。但し今日かの御舎利の御出である日にて候。われら当番にて唯今戸を明け申さんとて。鑰を持ちて罷り出で候。まづこの舎利を御拝みあつてその後山門に登りて十六羅漢をも

拝ませ申し候べし此方へ御出で候へ

ワキ「あらありがたやさらば御供申し候べし

狂言「がらがらさつと御戸を開き申して候よくよく御拝み候へ

けにや事…て

拍子ニ合ハズ

ワキサシ上「げにや事として何か都のおろかなるべきなれども。殊更霊験あらたなる。佛舎利を拝み申す事の貴さよ。

これなん足疾鬼が韋駄天
取り返し給ひし。現住奇特の牙
舎利の。相好。感涙肝に銘ずるぞ
や。一心頂禮萬徳圓滿釋迦如來

○小謠

上歌　同　拍子ニ合　○

ありがたや。今も在世の心地して。今も
在世の心地して。目のあたりなる佛
舎利を。拝する事のあらたさよ。何

にたとへん墨染の袖をも濡らす。
氣色かな袖をも濡らす氣色かな。○

ありがたや佛在世の御時は以下

シテ男上
ツヨク
拍子ニ合ハズ

ありがたや佛在世の御時は。法の御聲
を耳にふれ。聞法値遇の結縁に。一劫
をも浮かむこの身ながら。二世安
樂の心を得るに。後五の時代の今更
に。なほ執心の見佛の縁。嬉しかり

ける。時節かな　ワキ詞サラリ「われ佛前に観念
し。寥々とある折節に。御法を貴む
聲すなり。いかなる人にてましま
すぞ　シテ確カリメニ「これはこの寺のあたりに
住む者なるが。妙なる法の御聲を
受けてこゝに立ち寄るばかりなり
ワキサラリ「よし誰とてもその望み。佛舎利を

拝まんためならば。同じ心ぞわれも旅人
シテカヽル上スラリヨワク「来るもよそ人　ワキサラリ「所も亦　シテワキ二人スラリ「都の邊
東山のふもとに續ける峯なれや

○小謡　庭の松風さえかへり

上歌同　拍子ニ合　○サラリメ「月雲の古き寺井は水澄みて古き
寺井は水澄みて。庭の松風さえかへ
り。更け行く鐘の聲までも。心耳
を澄ます夜もすがら。げに聞けや

峯の松。谷の水音澄み渡る嵐や法

を。唱ふらん嵐や法を唱ふらん。

クリ地上 それ佛法あれば世法あり。煩悩あれば

菩提あり。佛あれば衆生もあり。

善悪又不二なるべし

〇サシ曲獨吟

シテサシ上 然るに後五百

歳の佛法。既に末世の折を得て

同 西天唐土日域に。時至つて久方の月

クリ地

の都の山並に。佛法流布のしるしとて。

佛骨を納め奉り

シテ げに目前の。妙光

の影

同 この御舎利に。しくはなし

クセ 然るに。佛法東漸とて。二如来四菩薩

も。皆日域に地をしめて衆生を済度

し給へり。常在霊山の秋の空僅かに

二月に臨んで魂を消し。泥洹雙樹の

昔の庭遺跡を聞いて腸を断つ。
ありがたや佛舎利の御寺ぞ在世
なりける。げにや鷲の御山も在世の
みぎんにこそ草木も法の色を見せ。
皆佛身を得たりしに　今はさみし
くすさまじき　月ばかりこそ昔なれ。
孤山の間にはよそよそ白毫の

秋の月を禮すとか。滄海の波の上に。
僅かに四諦の暁の雲を引く空のさ
みしささぞな鷲の御山。それは上
見ぬ方ぞかし。こゝはまさに目前
の。佛舎利を拜する御寺ぞ貴か
りける。　不思議やな俄かに晴れたる
空かき曇り。堂前に輝く稲光。

シテ「今はこはそもいかなる事やらん
何をか包むべき。その古の疾鬼が
執心。なほこの舎利に望みあり許
し給へやお僧達 ワキ「こはそも見れば
不思議やな。面色かはり鬼となりて
○仕舞 ○シテ詞「舎利殿に臨み昔の如く ワキ「金冠を見
せ シテ「寶座をなして 同「栴檀沈瑞香。栴

稲妻の

舎利殿に飛び上り

天井を蹴破り

檀沈瑞香の。上に立ちのぼる雲煙
を立て〻。稲妻の。光に飛び紛れて。
もとより。足疾鬼とは。足疾き鬼
なれば。舎利殿に飛び上りくる
くるくると。見る人の目をくらめて。
その紛れに牙舎利を取つて。天井
を蹴破り虚空に飛んであがると

韋駄天とはわがことなり

見えしが行方も知らず失せにけ
り行方も知らず失せにけり○中入間

ツレ韋駄天上 イロエ(シテ出) 早笛(ツレ出) 拍子不合ハズ
「そもそもこれはこの寺を守護し
奉る。韋駄天とはわがことなり。こゝ
に足疾鬼といふ外道。在世の昔の執

その牙舎利

心残つて。又この舎利を取つて行く。
上ゲ「いづくまでかは遁すべき。その牙舎利。
置いて行け
後シテ足疾鬼「いや叶ふまじとよこの
佛舎利は。誰も望みのあるものを
同「欲界色界無色界 欲界色界
無色界。化天耶摩天他化自在天。
三十三天攀ぢ上りて。帝釈天まで

梵王天より出であひ給ひて

追ひあぐれば。梵王天より出であひ給
ひて。もとの下界に。追つ下す イロエ

能ノ時イロエノ終リニ もとの下界に追つ下すノ句ヲ地謡フ

首を踏まへて舎利はいかに

シテ左へ行くも右へ行くも。前後も天地も塞がりて。疾鬼は虚空にくるくるくると。渦巻い廻るを。韋駄天立ち寄り寶棒にて。疾鬼を大地に打ち伏せて。首を踏まへて牙舎利はいかに。出だせや出だせと責められて。泣く泣く舎利をさし上ぐれば。韋駄天舎利

韋駄天舎利を取り給へば

を取り給へば。さばかり今までは。足疾き鬼の。いつしか今は。足弱車の力も盡き。心も茫々と起きあがりてこそ。失せにけれ

小鍛冶

作者不詳

曲柄　切能　五番目(略初能)
季節　不定
稽古順　五級
所　京都三條粟田口小鍛冶宗近邸

梗概

一條の院に仕へ奉る橘の道成(ワキツレ)勅命を奉じて三條の小鍛冶(ワキ)の私宅に赴き、御劔を打つべしとの勅諚を傳ふ。宗近相鎚を打つほどの者のなきに困じ、かゝる大事は神の力を賴むの外はなしと、その氏の神なる稻荷明神に參りしに、一人の童子(前シテ)出で來りて宗近を呼び留め、御劔は必ず成就すべしといひて、和漢に於ける劔の威德などを語り、その時節に到らば、來りて汝を助けんといひ捨てて稻荷山の方に消え失せぬ。(中入)

宗近乃ち御劔を打つべき壇を飾り、四方に本尊をかけ、祈願を籠むれば、稻荷明神(後シテ)現れ出で、相鎚を打ち給ふ。かくて打ち上げたる劔の表に小鍛冶宗近、裏に小狐と銘をうち、天下第一、二つ銘のこの御劔を以て四海を治め給はば、天下泰平五穀成就すべしと、勅使にこれを捧げたる後、神體はまたもとの稻荷の峯に歸り給ふ。

謡ひ方

切能物も數あれど、此曲の如く祝言の意を含む物は少なし、又略初能にも使ふ。凡て確かりと謡ふと雖も重くなるを好まず。

△**シテ**　前は童子なれば呼掛も朗かに大きく、ワキとの掛合も朗かに謡ふ。サシ、上端はさらりと、「よし誰とても」と前と氣を變へ閑かに、「其時我を待ち給はゞ」と確かりと謡ふ。

△**後シテ**　「童男壇の」と調子抑へめに、「神體時の」と手强く、「天下第一」と少しゆるめて謡ふ。

△**ワキ**　位を取りて確かりと、ワキツレとの掛合は叮嚀に、「此上は」と上歌の調子にて確かりと、「言語道斷」と氣を替へ閑かに、シテとの掛合は落着いてさらりと、「宗近勅に隨つて」と朗かに、「仰ぎ願はくは」より祝詞なれば淀みなく、「願はくは」より氣を替へ乘つて、「謹上再拜」と改めてたつぷりと「かくて御劔を」とさらりと謡ふ。

△**ワキツレ**　勅使なれどさらりと謡ふ。

▽地　初同はワキの位を受けて朗かに、「壁に耳」と弱吟にてさらりと、クリは强吟にてさらりと大きく、サシはさらりと、クセは閑かに出で段々と運びを附け、「通力の身を」と閑かに出で、「夕雲の」より位進めて、返しの「失せにけり」と閑め、中入後「願はくは」朗かに段々と運び、「いかにや宗近」と勢ひ能く急に出で、「唯頼め」と大きく少し閑め、「童男壇の」と位進めて、以下さら〳〵と謡ひ、「打ち奉る」と手強く勢ひを附け寛たりと、以下段々と位進んで謡ひ納む。

能の異式（小書）

白頭 — 總じて曲が閑かになり、前シテは尉となり、後は早笛なく働も抜ける。白頭は神狐といふ。謡にも緩急多し。

黒頭 — 極重き習にて一子相傳となる。前シテは喝食に腰卷モギドウとなり手に稲穂を持つ。後シテは亂序となり、狐蛇と云ふ面を用ふ。黒頭は靈狐と云ひ、全體に緩急多く、後は早く强きものなり。

語　釋

三條の小鍛冶 — 一條天皇の御時、京都三條に住居したる刀鍛冶の名匠なり。姓は橘、信濃大椽たり。本朝鍛冶考に、「宗近一條御宇永延號三三條古鍛冶一少納言入道信西蟬丸或小狐丸則此作也」云々とあり。考證の古記錄に見えず、一條兼良の尺素往來及び諸國鍛冶寄等に見ゆれども傳記詳知し難し。

詔の御名をば云々 — 詔にては意味通ぜず、皇子（みこ）の尊（みこと）をばとありしを傳訛せしにはあらざるか。

伊勢や尾張の云々 — 伊勢物語に、「伊勢尾張のあはひの海づらを行くに、波のいと白く立つを見て、いとゞしく過ぎにし方の戀しきに羨ましくも歸る波かな」とあるを引用していふ。

巖窟に — 夷の住める巣穴のさまをいふことなるべし。

血は涿鹿の川となつて云々 — 殺傷の多きを形容していふ。涿鹿は、支那の太古に黄帝と蚩尤と大合戰のありし地名。血を漲らして楯を流す程の狀態をいふ。

御狩場を始め給へり — 日本武尊の夷を滅ほし給ひし樣を學びて、長く紀念の爲に御狩の御遊を朝儀として始め給へる意。

御矛より始まれり — 先づ本朝武器の起りをいふ。

僧伽陀國 — 印度の内にあり。

天國 — 刀鍛冶諸流の元祖にて、文武天皇大寶年中、大和國宇陀郡に住みたる人なりと傳ふ。

十方恒沙の諸神 — 恒沙は、印度の恒沙といふ大河の沙をいふ。即ち無數無限の意で、數多き諸の神とのこと。

表に小鍛冶宗近と打つ — 銘を打つこと。

神體時の弟子なれば云々 — 稲荷の神體は、宗近を助けて相鎚打ちたる弟子なれば、其銘をも裡面に打つなり。

小狐 — 稲荷の神體は狐なりといふ俗說によりていふ。

領掌 — 拜命の意。

御劔の刄の — 刄に亂れ燒きといふ燒方あればいひかけたり

稲荷の明神 — 伏見の稲荷のこと。

なべてならざる — 唯人ならぬをいふ。

壁に耳 — 壁に耳ありとの諺をいふ。

岩の物いふ — 是もいつの間にか密事の漏るゝをいふ諺。

漢王三尺の劔 — 朗詠集、帝王篇に、「漢高三尺之劍、坐制二諸侯一、張良一卷之書、立登二師傅一」とあり。これ後漢書の文なり。上句は、漢高祖、「蕭何に告て曰く、我布衣より起り手に三尺の劍を提け而して高く上りて天下を取る」といひし事をいふ。下句は、張良は字を子房といひ高祖の臣なり。下邳といふ土橋にて老翁の落せし履をとりて得させしより、老翁懐中せし兵書を與へ敎へたり。後張良、高祖に仕へて謀を帷幄の中にめぐらし、勝つことを千里の外に決したりといふことなり。

煬帝がけいの劔周室の光を奪へり — 煬帝は隋の國王、周は隋に滅亡されしなれば、即ち周室は武威を奪はれしといふことなるべし。

玄宗皇帝の云々 — 唐の玄宗の時に、鍾馗の亡魂朝廷に現れて惡鬼を退治せし古事のこと。

魍魎鬼神 — 惡鬼の種類

刄は雲を亂したれば — 雲の形を亂れ燒きにせしをいふ。

天の叢雲 — 草薙の劔の始めの名なり。もとより小狐丸とは別物なれど、雲形のあるによりて斯くはいひなしたるなり。

二つ銘 — 宗近と小狐と表裏に二銘あるをいふ。

東山 — 稲荷山は東山の南に續きたれば斯くいふ。

間狂言

宗近の弟子。

こゝ許へ用ありさうに罷り出でたるを。一圓御存じない御方は。何者ぞと思し召されうずる。是は都三條の小鍛冶宗近の弟子にて候。さる程に珍しからぬいひ事なれど。まづ宗近の打ち申されたる太刀（たち）刀は。障る所が欠けぬ鈍らぬ物切なるによつて。老若とも小鍛冶を指さぬ人は。彼方此方の付合にても皆初心の樣に宣ふ程に。國々在々よりも日々に打物誂へに來れど。少しも隙なくて皆請け取り申されぬを。種々の緣取りをして御頼みなさるゝ。それに付きこゝに目出度き事のあるぞ。今の帝（みかど）一條の院。日頃つくづくと思し召す樣は。劔を打たせて置かんと思し召され。今日本には何といふ者が太刀刀をよく打つぞと宣旨あるを。或古老の臣下宣ふ樣は。小鍛冶に勝りたるは御座なき由風聞致すとあれば。けにも彼が上手なる由一同に仰せ上げらるゝ。殊に今夜帝に不思議の御靈夢のましますにより。橘の道成の卿。宣旨を三條の小鍛冶宗近に御劔

を仕れとあつて勅使立つを。宗近一世の面目と思ひ謹んで申し上げらるゝ様は。尤も御劔などを仕るには。我に劣らぬ相鎚打つ者なくしては罷りならず候へども。併し倫言汗の如しと申す程に。即ち領掌申されたるが。なんぼう大事のお請けにて候。さて宗近心に思はるゝ様。かやうの大事の打物には。神力を頼まずはなるまじきと存ぜられ。まづ氏の神なれば稲荷へ参り給ふ處に。いづくとも知らず見馴れぬ人の出でゝ。面々は三條の小鍛冶宗近にてあるか。雲の上より御劔を仕れとあつて勅使立つとも。心易く思ひお請け申し上げ。急ぎ壇を飾りて待ち給へ。その時節われ等の行きて力を添へんといひ敢へず。その儘稠の内へ入り給ふ。この御劔の勅は唯今なるに。はや知りたるはさてもさても奇特なりとて。いよ〱稲荷の明神を信心に存じ。今下向申されて候。いやそこ許の賑やかなは何事ぞ。ぢやあ。さても早い事かな。さりながら此由を外の弟子ども存ぜまい程に。急いで觸れて聞かさう。やあ〱皆々承り候へ。頼み申す宗近の宿所には。今度の御劔を仕らんとて。悦び勇み假屋を建て。新しく鐵床を据ゑ。其上には壇を飾りて七重に注連を引き。稲荷の明神を勸請申し清淨潔齋にせんとて。夥しき用意ぢやと申す間。各々も早早出でられて尤もに候。構て其分心得候へ〱。

装束附（小鍛冶）

役	人物	装束
ワキツレ	大臣 橘道成	洞烏帽子　着附厚板　白大口　袷狩衣　繡紋腰帯　扇
ワキ	三條小鍛冶宗近	侍烏帽子　着附厚板　白大口　掛直垂　繡紋腰帯　小刀　扇
前シテ	童子	面、慈童　黑頭　鉢卷　襟淺黄　着附摺箔　水衣　縫腰帯　童扇
後ワキ	三條小鍛冶宗近	風折烏帽子　着附厚板　白大口　長絹　繡紋腰帯　扇
後シテ	稲荷明神	面、小飛出　赤頭　狐戴　鉢卷　襟紺　着附厚板　半切　法被　繡紋腰帯
作物		一疊臺　祭壇　脇幣
小道具		鐵床　鎚二　刀身

小鍛冶

素謡座席順　シテ　ワキ　ワキツレ

ワキツレ名乗

ワキツレ大臣詞　サラリ

「これは一條の院に仕へ奉る橘の道成にて候。さても今夜帝不思議の御告ましますにより。三條の小鍛冶宗近を召し。御剣を打たせらるべきとの勅諚にて候間。唯今宗近が私宅へと急ぎ候。いかにこの家の内に宗近

があるか「宗近とは誰にてわたり
候ぞ「これは一條の院の勅使にてある
ぞとよ。さても帝今夜不思議の
御告ましますにより。宗近を召し
御剣をうたせらるべきとの勅諚なり。
急いで仕り候へ「宣旨畏つて承り
候。さやうの御剣を仕るべきには。われ

に劣らぬ者相鎚を仕りてこそ。御
剣も成就候べけれ。これはとかくの御
返事を申しかねたるばかりなり
「げにげに汝が申すところは理なれども。
帝不思議の御告ましませば。頼もし
く思ひつ。はやはや領掌申すべしと。
重ねて宣旨ありければ「この上

同　受ケテスヽリ

はとにもかくにも宗近が　とにもかく
にも宗近が進退こゝに谷りて御剱
の刃の乱るゝ心なりけりさりながら
君政道直なる今の御代なれば若
しも奇特のありやせんそれのみ
頼む心かなそれのみ頼む心かな

言語道断

ワキ詞　確カリメニ
「言語道断一大事を仰せ出されて候

ものかなかやうの御事は神力を頼み
申すならではと存じ候某が氏の神は
稲荷の明神なればこれより直に
稲荷に参り祈誓申さばやと存じ候

前シテの出

シテ童子　呼掛　朗カニ
「なうなうあれなるは三條の小鍛冶
宗近にて御入り候か　ワキ　サラリ　「不思議やな
なべてならざる御事のわが名を

さして宣ふは。如何なる人にてまし
ますぞ　シテ「雲の上なる帝より。剱を打ち
て参らせよと。汝に仰せありしよなう
ワキ「さればこそそれにつけてもなほ
なほ不思議の御事かな。剱の勅
も唯今なるを。早くも知ろし召さ
るゝ事。返す返すも不審なり

シテ「げにげに不審はさる事なれども。
われのみ知ればよそ人までも
○小謡
ワキカヽル上哥「天に聲あり　シテ「地に響く　同上「壁に耳。
岩の物いふ世の中に。岩の物いふ
世の中に。隠れはあらじ殊になほ。雲
の上人の御剱の。光は何か暗からん。
たゞ頼めこの君の。恵みによらば御剱

○サシ曲獨吟

もなどか心に。叶はざるなどかは叶はざるべき。○クリ上 それ漢王三尺の劔。居ながら秦の乱れを治め。又煬帝がけいの劔。周室の光を奪へり ○サシ上「その後玄宗皇帝の鍾馗大臣も 同 劔の徳に魂魄は。君邊に仕へ奉り シテ中「魍魎鬼神に至るまで 同 劔の刃の光に

シテ中「恐れてその寇をなす事を得ず 同中「漢家本朝に於て。劔の威徳申すに及ばぬ。奇特とかや又わが朝のその始め。人皇十二代。景行天皇。みことのりの御名をば日本武と申しゝが。東夷を。退治の勅を受け。關の東も遥かなる。東の旅の道

すがら。伊勢や尾張の海面に立つ波までも。帰る事よと羨み。いつかわれも帰る波の。衣手にあらめやと。思ひつゞけて行くほどにこゝやかしこの戦ひに

同 人馬巌窟に身を砕き。血は涿鹿の川となつて。紅波楯流し數度に及べる夷も兜を脱いで茅を臥せ。皆降參を申しけり。尊の御宇より狩場を始め給へり。頃は神無月。二十日餘りの事なれば。四方の紅葉も冬枯の遠山にかゝる薄雪を。眺めさせ給ひしに

同 夷四方を圍みつゝ枯野の草に火をかけ。餘焰頻り

に燃え上がり。敵攻鼓を打ちかけて。
火焔を放ちてかゝりければ

○仕舞

尊は剱を抜いて

シテ 尊は剱を抜いて 同 尊は剱を抜
いて。あたりを拂ひ。忽ちに。焔も

四方の草を

たち退けと。四方の草を。薙ぎ拂へ
ば。剱の精霊嵐となつて。焔も草
も。吹き返されて。天に輝き地に充

天に輝き

地に充ち満ちて

ち満ちて。猛火は却つて敵を焼け
ば。數萬騎の夷どもは忽ちこ

失せてんげり

にて失せてんげり。その後。四海治ま
りて人家戸ざしを忘れしも。その
草薙の故とかや。唯今汝が打つべ

その瑞相の御剱も

きその瑞相の御剱も。いかでそれに
は劣るべき。傳ふる家の宗近よ。心安く

も思ひて下向し給へ。

ワキ詞「漢家本朝に於て剱の威徳。時にとつての祝言なり。さてさて御身は如何なる人ぞ

その時われを待ち給はゞ

シテ「よし誰とてもたゞ頼め。まづまづ勅の御剱を。打つべき壇を飾りつゝ。その時われを待ち給はゞ

同「通力の身を変じ。通力の身を変じて。必ずその時節に参り会ひて御力をつけ申すべし待ち給へと。夕雲の稲荷山。行方も知らず失せにけり行方も知らず失せにけり

中入間

ワキ上「宗近勅に随つて。即ち壇にあがりつゝ。不浄を隔つる七重の注連。四方に本尊をかけ奉り。幣帛を捧げ。

宗近勅に随つて平

中 仰ぎ願はくは。宗近時に至つて。
人皇六十六代。一條の院の御宇に。
その職の譽れを蒙ること。これ
私の力にあらず。伊弉諾伊弉册の。
天の浮橋を踏み渡り。豐葦原を
探り給ひし御矛より始まれり。
中 その後南瞻僧伽陀國。波斯彌陀

尊者よりこの方。天國ひつきの子孫
に傳へて今に至れり。願はくは 同 願は
くは。宗近私の功名にあらず。普天率
土の勅命によれり。さあらば十方恒
沙の諸神。唯今の宗近に力を合はせ
てたび給へとて。幣帛を捧げつゝ。
天に仰ぎ頭を地につけ。骨髓の丹誠

聞き入れ納受せしめ給へや。ワキ「謹上再拝

地上「いかにや宗近勅の釼。いかにや宗近
勅の釼。打つべき時節は虚空に知
れり。頼めや頼め。たゞたのめ

後シテの出

後シテ 稲荷明神「童男壇の上にあがり。童男壇の
上にあがつて。宗近に三拝の膝を
屈し。さて御釼の。鐵はと問へば。

宗近も恐悦の心を先として鐵敷
り出だし。教への鎚をはつたと打て
ば シテ「ちやうと打つ　ちやうちやう
ちやうと打ち重ねたる鎚の音。天
地に響きて。おびたゞしや　ワキ詞「かくて

ちやうと打つの

天地に響きて

御釼を打ち奉り。表に小鍛冶宗近
と打つ　シテ「神體時の弟子なれば。小狐

○仕舞

と裏にあざやかに打ち奉る御劔
の。刃は雲を乱したれば。天の叢雲
ともこれなれや「天下第一の

同
天下第一の。二つ銘の御劔にて。四海を
治め給へば五穀成就もこの時なれ
や。即ち汝が氏の神。稲荷の神體小
狐丸を。勅使に捧げ申し。これまで

なりといひ捨てゝ。又叢雲に。飛び乗
り又叢雲に。飛び乗りて東山稲
荷の峯にぞ帰りける。○

石橋

作者不詳

梗概

俗名を大江の定基といひし寂昭法師(ワキ)唐土に渡り、清涼山に參らんとして、こなたなる石橋を渡らんとすれば、折から來かゝりたる樵童(前シテ)これを戒めて曰く、この橋はその昔名を得し高僧達も難行苦行捨身の行にて、こゝに月日を送りたる後、始めて渡り給ひしものなり。たやすく渡らるべき橋にはあらず。見給へ、瀧波は雲より落ちて數千丈、瀧壺は霧深うして身の毛もよだつばかりなる間に、僅かに石のかかれる橋にして、苔は滑りて足も立つまじき樣ならずやと。更に寂昭の問に應じて、橋の由來を委しく語りたる後、向ひに見ゆる清凉寺は文殊の淨土なれば、やがて目前の奇特もあるべし、暫く待ち給へといひ捨てゝ消え失す。(中入)待つほどもなく、文殊の愛獸獅子(後シテ)現れ出で、咲き匂ふ牡丹の花に狂ひ戲れて、御代の萬歳千秋をことほぐ。

曲柄　五番目
季節　四月
稽古順　重習奥傳
所　支那浙江省天臺山石橋

謠ひ方

重習奥傳にして、能としては獅子の秘曲に重きを置く、凡て强吟のみなれば剛健に寛たりと、重習の位を失はぬ樣に謠ふ。

△シテ　普通にては童子姿なれば、姿より云へばさら〳〵と謠はず、又餘り重くなれば老人となる、別して出の一聲、サシ、下歌、上歌は志賀と同じき文句なり、されど彼は平物の尉是は重習の童子なれば、其謠ひ分けむづかしきなり、總じて穩健に淀まぬ樣に、掛合は落着いて寛たりと、上端は引立てゝ謠ふべし。

△ワキ　入唐せし寂昭法師にて、紫の水衣を着る、最も重き物なれば名乘は重んもりと、落着いて充分に位を持ち、シテとの掛合も確かりと位を保ち、シテの位を取らぬ程度に、初同前の「心も早」と氣の拔けぬ樣に地に渡すべし。

△地　初同は調子高めずに閑かに出で、クリは稍引立てゝ、クセは閑かに出で、充分に愼重に位を取る、此クセは甚だ難曲なり、上端より引立てゝ稍運びを附け、中入前をとくと閑め、

切の「獅子團亂旋」より獅子の留とて、乘地にて位急になり、雄壯活潑に、こけぬ樣に勢ひを込めて、留は囃子が殘る留となれば、靜めず引かずに謡ひ切るなり。

能の異式（小書）

大獅子 ― 前シテが尉姿となり、後シテが白頭赤頭と二人になる。又子方二人、赤頭にて牡丹の枝を持ち、合舞する事もあり。

師資十二段 ― 大獅子と同じく獅子の段數に違ひあり。

語　釋

大江の定基 ― 齋光の子なり。天元中藏人に補せられ、尋いで參河守となり、妾力壽といふを愛し、遂に妻を追ひこれを迎へて寵愛比無し、後力壽病死す。定基大に無常を觀じ、永延二年出家して僧となり、如意輪寺の寂心を師とす。寂心は大内記慶滋保胤なり。定基卽ち寂昭と改め、延暦寺の源信に就く。長保四年宋に赴き、兩淛の僧智禮に臺宗問目二十七條を質す。宋王又寂昭を厚遇し、號を圓道大師と賜ふ。遂に吳門寺に止り、長元七年宋に卒すと傳ふ。

靑凉山 ― 支那山西省代州五臺山の別名。

石橋 ― 支那浙江省、天臺縣天臺山中にあり、橋の色靑白にして長さ七丈許り、東頭の廣さ二尺、西頭の廣さ七尺、龍形龜背にして虹梁を亙せるが如し、兩澗合流し橋下を過ぎて瀑布となり西に流る、橋の西頭二丈許りの所に、巖高さ一丈なるものありて通ずるを得ず、天臺山は文殊菩薩の淨土なるが故に、此石橋に獅子を配して作れるなり。

山路に日暮れぬ ― 朗詠集、山家篇に載す、暮春遊覽賦序、紀齊名の詩句、「山路日暮、滿レ耳者、樵歌牧笛之聲、澗戸鳥歸、遮レ眼者、竹烟松霧之色、」とあり。この句は齊名。禪林寺にて作れる序賦なり。歌笛烟霧の色も聲も物淋しくあはれなる夕暮の狀態なり。

謬つて半日の客たりし云々 ― 朗詠集、仙家に載す、暮春同賦ニ落花亂ニ舞衣一各分ニ一字一應ニ太上皇製一、大江朝綱、「紫宮之東横街之北不レ經ニ幾程一有ニ一仙居一、蓋太上皇遁世之別館也、夫縱風流、地得ニ形勝一、屬ニ千花之爭綻一、賜ニ一日之佳遊一、王公卿士皆是龍尾之昔臣、墨客伶人莫レ不ニ鳳城之舊僕一、於レ是遠尋ニ姑射之岫一、誰傳ニ鶯歌一、亦問ニ無何之鄕一、不レ奏ニ蝶舞一、拔俗之韻雖レ高賞レ物之跡猶闕、是則我皇仁及ニ動植一、德邁ニ義古一也、于レ時九春漸闌、百藥散落、當ニ舞袖之邐進一、混ニ花色之漫飛一、迄ニ彼離鴻之歌忽起飛燕之態早廻一、萬朶匂飄、眼迷ニ赴レ節之處一、千株艶發、魂亂ニ轉レ裾之程一、不レ知落花之爲ニ舞衣一也、不レ知舞衣之爲ニ落花一也、人間勝事於レ是而盡、何必蕙帶蘿衣、抽ニ簪於ニ北山之北一、蘭橈桂檝、鼓ニ枻於ニ東海之東一、然後樂ニ其閑放一、養ニ其幽情一者乎、臣霑入ニ仙家一、雖レ爲ニ半日之客一、恐歸ニ舊里一、纔逢ニ七世之孫一、徒倚而立、未レ定ニ去留一、云爾、謹序」これ詩序なり。「昔晉の世に王質といふもの、木を伐らんとて斧を腰にはさみて石室山といふ山に入りぬ。山中に童子數多集ひ、圍碁をなしてゐたりけるを、王質暫く見居たる程に、日暮れ方になりければ、さて歸らんとするに斧の柄朽ちたり。驚きて家に歸り見れば、我が住みし所とも覺えず變れり。人に問へども知れるもの更になし。人あり告げて曰く、我が先祖山に入りて歸らざりける人ありけりと聞き傳へたり。若し其人かといへり。よく尋ぬれば七世の孫にてなんありける。」と述異記に見えたり。

泥梨 ― 地獄のこと。梵語泥梨耶（ニラヤ）といふ。無有、又は卑下と譯す。佛教所說の十界中の最劣境界にして、地下五千由旬の處にありと稱せらる。正法念經に、「この獄堅牢にして、行出を許さず、喜樂のことなく、不如意、不自在、不可愛樂なり。中に八寒八熱等の區別あり。罪業の多少、輕重に從つてその生所を異にす」と說けり。

天の浮橋 ― 天地の間の通路をいふ。古事記、日本紀等を見よ。

獅子團亂旋 ― 獅子は盤涉調の樂名。團亂旋は壹越調の樂名。

たいきんりきんの云々 ―法華經譬喩品第三に、「偈以ニ白牛一膚色充潔、形體姝好、有ニ大筋力一、行步平正、其疾如レ風」と說けり。

牡丹芳 ― 白氏文集、第四卷に載す、牡丹芳に、「牡丹芳、牡丹芳黃金蘂綻紅玉房、千片赤英霞爛々、百枝絳艶燈煌々、照地初開ニ錦綉段一、當レ風不レ結ニ蘭麝嚢一」とあり。

獅子の座 ― 傳燈錄に、「佛は人中の獅子なり。凡そ佛の座するところ、若しくは床もしくは地、皆獅子の座と名づく」とあり。卽ち獅子の百獸中に於て最勇なるが如き意にて、佛座を獅子座（シンハーサナ）といふなり。

間狂言

仙人間。

装束附（石橋）

役	装束
ワキ 寂照法師	金緞角帽子（沙門） 着附白綾 白大口 紫水衣 掛絡 白腰帯 扇 水晶数珠
前シテ 童子	面、慈童 黒頭 鉢巻 襟赤浅黄 着附縫箔 水衣 縫腰帯 童扇
後シテ 獅子	面、獅子口 赤頭 鉢巻 襟紺 着附段厚板 赤地半切 法被 繍紋腰帯
作物	一畳臺二 紅白牡丹

素謡座席順 シテ ワキ

石橋

ワキ僧詞 裕カニ確カリ

「これは大江の定基といはれし寂昭法師にて候。われ入唐渡天し。始めて彼方此方を拝み廻り。唯今清涼山に参りて候。これに見えたるが石橋にてありげに候。暫く人を待ち委しく尋ね。この橋を渡らばやと存じ候

シテ童子上ル 一セイ ツヨク 拍子ニ合ハズ

「松風の花を

薪に吹き添へて雪をも運ぶ山路かな山路に日暮れぬ樵歌牧笛の聲。人間萬事様々の世を渡り行く身の有様。物毎に遮る眼の前。光の陰をや送るらん。餘りに山を遠く來て雲又跡を立ち隔て入りつる方も白波の。入りつる方も白波の。谷の

川音。雨とのみ聞えて松の風もなし。げにや謬つて半日の客たりしも。今身の上に知られたり今身の上に知られたり

ワキ詞「いかにこれなる山人に尋ぬべき事の候

シテ「何事を御尋ね候ぞ

ワキ「これなるは承り及びたる石橋にて候か

シテ「さん候これこそ石橋にて候へ。向ひは文殊の

淨土清涼山。よく／＼御拜み候へ
ワキ「さては石橋にて候ひけるぞやさあらば
身命を佛力にまかせて此の橋を渡ら
ばやと思ひ候　シテ「暫く候。そのかみ名を得
給ひし高僧達も。難行苦行捨身の
行にてこゝにて月日を送りてこそ。
橋をば渡り給ひしに。獅子は小虫を食

はんとても。まづ勢ひをなすとこそ聞
け。わが法力のあればとて行く事かた
き石の橋をたやすく思ひ渡らんとや。
あら危しの御事や　ワキカヽル上「謂れを聞けばあ
りがたや。たゞ世の常の行人は。左右なう
渡らぬ橋よなう　シテ詞「御覽候へ此の瀧波の。
雲より落ちて數千丈。瀧壺までは

ワキ カヽル上ゲ「霧深うして。身の毛もよだつ谷深み
「巖峨々たる岩石に シテ「僅かにかゝる石
の橋 ワキ「苔は滑りて足もたまらず
シテ「渡れば目も昏れ ワキ「心もはや 上歌 同「上の空
なる石の橋。上の空なる石の橋。まづ御
覧ぜよ橋もとに。歩み臨めばこの橋の。
面は尺にも足らずして。下は泥梨も

白波の。虚空を渡る如くなり。危
しや目もくれ心も。消え消えとな
りにけり。おぼろけの行人は。思ひ
もよらぬ御事 ワキ 詞「なほなほ橋の
謂れ御物語り候へ クリ 地 上「それ天地開闢
のこの方。雨露を降して國土を渡る。
これ即ち天の。浮橋ともいへり

「その外國土世界に於て橋の名所さまざまにして水波の難を遁れ。萬民富める世を渡るも。即ち橋の德とかや。然るにこの石橋と申すは人間の渡せる橋にあらず。おのれと出現してかける石の橋なれば石橋と名を名づけたりその面僅かに尺よりは狭うして苔はなはだ滑かなり。その長さ三丈餘。谷のそくばく深き事千丈餘に及べり。上には瀧の糸。雲より懸りて。下は泥梨も白波の音は嵐に響き合ひて。山河震動し。雨つちくれを動かせり。橋の氣色を見渡せば。雲に

聳ゆる粧ひのたとへば夕陽の雨の後に虹をなせる姿又弓を引ける形なり

シテ上「遥かに臨んで谷を見れば

同「足すさまじく肝消え進んで渡る人もなし。神変仏力にあらずは誰かこの橋を渡るべき。向ひは文殊の浄土にて常に笙歌の花降りて。笙笛琴箜篌夕日の雲に聞え来。目前の奇特あらたなり。暫く待たせ給へや。影向の時節も今幾程によも過ぎじ

中入

獅子ノル上

獅子「獅子団乱旋の舞楽のみぎん。獅子団乱旋の舞楽のみぎん。牡丹の花房にほひ充ち満ち大きんりきんの獅子頭。打てや囃せや牡丹芳。牡丹芳。

黄金の蕊。現れて。花に戯れ枝に伏し
轉びにも上なき獅子王の勢ひ
靡かぬ草木もなき時なれや。萬
歳千秋と舞ひ納め。萬歳千秋と
舞ひ納めて。獅子の座にこそ直り
けれ

昭和七年四月十日納本
昭和七年四月十五日發行

著作權所有
複製不許

觀世流 昭和版

訂正著作者 廿四世 觀世左近
東京市神田區錦町一丁目十番地

發行兼印刷者 檜常之助
東京市神田區錦町壹丁目十番地
振替東京三五五二番、電話神田二五二六番

發行所 檜書店
京都店・京都市二條通麩屋町東北角
振替大阪三六一八番、電話上二一九〇番

橋本奥書

終